

第8章

サウジアラビアの聖地管理と再開発

石黒 大岳

はじめに

現在のサウジアラビア王国（以下、サウジアラビア）は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、アブドゥルアジーズ・イブン・サウード（‘Abd al-‘Azīz bin ‘Abd al-Raḥman bin Fayṣal Āl Sa‘ūd：以下、アブドゥルアジーズ）がサウード王朝を再興し、アラビア半島中央部に割拠する部族勢力を征服・糾合するかたちで成立した。サウジアラビアは、サウード家による征服王朝であり、国家建設の過程で厳格な宗教解釈に立脚するワッハーブ派の宣教活動を保護し奉じる立場をとったことが統治の正統性（legitimacy）の源泉となっている（中田 1995）。すなわち、統治者であるサウード家とその正統性として依拠するところは、18世紀に発生したワッハーブ派の宣教活動との政教盟約⁽¹⁾に基づく正統なイスラーム国家の守護者であり、世界中のムスリムが巡礼に訪れるマッカ（メッカ）とマディーナ（メディナ）の二聖都の守護者という位置づけである。とくに後者については、1986年にファハド国王（Fahd bin ‘Abd al-‘Azīz Āl Sa‘ūd, 第5代, 在位：1982～2005年）が、称号として「二聖都の守護者」（Khādīm al-Ḥaramayn al-Sharīfayn）を用い始めたことによって、より重きをおかれている（森 2014）。サウード家による統治の正統性と国王の権威は、ウェーバーの支配の正統性の3類型に照らし合わせると、伝統的支配に位置づけられる⁽²⁾。

サウード家による伝統的支配に基づく統治の正統性は、サウジアラビアの近代化による社会の変化や、過激派による挑戦、2011年の「アラブの春」と称されたアラブ諸国における政治変動の影響を受けて揺らぐ場面もみられたが、国民は表立った体制打倒の動きをみせておらず、おおむねサウード家による統治を受け入れているとみることができる。1950～1960年代に立憲君主制の樹立をめざした自由プリンス運動³⁾や1990年代以降に政治改革を求めた活動家や知識人による国王への建白書の上呈など、政治的な改革要求運動はあったが、いずれも体制内での改革を求めるものであった (Kéichichian 2013, 159-187)。これらの改革要求に対し、国王側は統治基本法の制定や任命制の諮問評議会を設置し、政府の意思決定過程の制度化に取り組んだが、国民の政治参加の拡大には程遠く、合法的支配としての正統性を担保するチャンネルとはなり得ていない (コーデスマン 2012, 186-196)。

経済的な資源配分に関しては、サウジアラビアは石油産業の隆盛とともに近代化が進み、1970年代後半には石油収入を元手に国民に教育や医療・福祉、その他公共サービスをほぼ無償で提供する高福祉国家を実現させた。また、レントの配分に加え、エリート間での権力分有によって、体制の安定性を確立させた (Stenslie 2012)。しかし、その後の政治改革要求の発生や、ファハド国王による二聖都の守護者の称号を用いた伝統的支配の挺入れをみると、レントの配分も、合法的支配としての正統性を代替して、国民からの支持を調達するには不十分のようにみえる。以上にかんがみると、サウジアラビアにおいて、伝統的支配による正統性の主張は、国民からの支持を調達し、体制の安定を導き出す効果があると体制によって認識されており、国民に効いていることが推察される。

そこで本章では、サウード家による支配の確立、とくにマッカとマディーナの二聖都が位置するヒジャーズ地方の統治に焦点を当てて、伝統的支配による正統性の主張によって、君主およびサウード家がサウジアラビアの統治においていかに国民からの支持を調達し、体制の安定を導き出そうとしているか、それに対する国民の受容への効果と態度とともに論じる。ヒジャーズ地

方において、サウード家の統治は在地の有力者による要請に基づいて開始され、統治の初期には市民の政治参加の公式なチャンネルとして、市民議会や諮問評議会が設けられていた。しかしながら、サウード家の統治は、市民の政治参加を制限する一方で、二聖都の守護者として統治の正統性を構築し、維持することに努めてきた(Kéchichian 2001, 81-83)。以下、第1節では、サウード家による国家建設(征服)事業における統治の正統性原理の導出、第2節ではヒジャーズ統治について、二聖モスクの守護者の称号を用いるに至る転換と、その実践としての二聖都の整備の取り組み、第3節では、統治の正統性を維持・再構築するための手段としてアブドゥッラー国王(ʿAbd Aullāh bin ʿAbd al-ʿAzīz Āl Saʿūd, 第6代, 在位: 2005~2015年)以降の二聖都の再開発事業の政治的意味と効果を検討する。

第1節 国家建設とサウード家による統治の正統性原理

1. サウード家による支配の確立

サウジアラビアの国家建設は第一次サウード朝(1774/5~1818年)まで遡り、その起源はイスラームの改革を唱えていたムハンマド・イブン・アブドゥルワッハブ(Muḥammad ibn ʿAbd al-Wahhāb)とそれを支えるサウード家のムハンマド・イブン・サウード(Muḥammad ibn Saʿūd)との盟約にある。サウード朝の成立は、アラビア半島中央部における部族社会の政治的分裂を克服し、定住民の強力な政治連合の形成に成功したことを意味する。第一次サウード朝はオスマン帝国に挑んだがために打ち破られた。その後、第二次サウード朝(1829~1889年)が再興されたが、それも一族内の内紛と、対抗勢力としてのラシード朝との争いに敗れて瓦解した。後に第三次サウード朝を再興し、サウジアラビアの初代国王となったアブドゥルアジーズはクウェートに逃れ、当時のクウェート首長であるムバーラク・サバーフ(Mubārak

bin Šabāḥ al-Šabāḥ, 大ムバーラク) に師事した。アブドゥルアジーズは1902年にナジュドへ密かに戻って挙兵し、ラシード家を破ってナジュドの支配権を奪回したのち、旗下の部族を糾合してイフワーン軍団を組織して、アラビア半島の征服活動を開始した。1925年には、ヒジャーズ地方の名望家(「ヒジャーズ祖国党」)の支持と協力を得てヒジャーズを併合し、1932年に国号をサウジアラビアと定め、イギリスの承認を得て国際的に国家としての承認を得た。サウジアラビアは部族社会とみなされているが、実際の支持基盤は定住民であり、商人層やウラマー(イスラーム法学者)が中心であった(中村 2001, 85-89; 2009)。

サウード家が、その統治を確立するにあたって統治の正統性原理を支える要素となったのは、理念的にはワッハーブ主義の宣教活動との政教盟約であったが、同時にナジュド地方に系譜の起源をもつ部族集団としての伝統と、それに立脚しつつ、国際情勢にも対応し、多様な人材を惹きつけ、彼らを使いこなしたアブドゥルアジーズ個人のカリスマも重要であった。これらの要素は、アラビア半島の征服活動を進めるあいだは非常に有効であったが、都市化が進んでいたヒジャーズ地方やシーア派人口が一定を占めるハサー地方(東部州)の統治にあたっては不十分であった。ワッハーブ主義が掲げる理念やナジュドを起源とする部族集団としての伝統は、これらの地域の人びとにとって受け入れ易いものではなかった(Ibrahim 2006, 47, 55-58; Ochsenwald 2009, 83-86)。

アブドゥルアジーズが1953年に亡くなり、1950年代からのナセル主義や、1970年代のムスリム同胞団の台頭、1979年イラン革命によるシーア派の政治的主張の顕在化といった、外部の対抗理念によるサウード家の統治体制に対する批判や、国内への影響が増すなかで、国民に幸福と安寧をもたらす人間の行為としての最高善の体现者という新たな統治の正統性原理(eudaemonic legitimacy)が確立された。実質的には石油危機によって増加した石油収入を補助金や無償の公共サービスとして提供し、国民の物質的な必要を満たす典型的なレンティア国家であり、石油価格の下落とともに分配の限界が格差と

して露呈し、汚職・腐敗批判へとつながった (Nibloc 2006, 10-13; Gause III 2015, 24-30)。しかしながら、サウジアラビアにおける最高善の体現者という統治の正統性原理の特色は、恩恵として物質的な必要を満たす対象が国民に限定されず、二聖都の巡礼者に対しても適用されたところにある。これによって、サウジアラビアの国王たちは、単なる恩恵の分配者ではなく、二聖都の守護者 (custodian) として国内外からの威信と名声を獲得し、統治の正統性原理の維持・再構築を図っていった。

2. サウジアラビアにおける国民意識形成の難しさ

サウジアラビアは国名に支配一族名が入っていることや、ワッハーブ主義の影響から、国民国家形成が困難な状況にある。困難な状況の具体的な内容としては、アイデンティティは複合的で、国民意識よりもムスリムであるという意識が先行するという特徴がある (冨塚 1993; Yamani 2000, 10-14)。また、ワッハーブ主義による制約によって、文化装置としての国家的祝祭を大々的に行うことが難しく、政治的・社会的動員によって国民意識を醸成するのは困難である。石油時代の到来によって、国民へのレントの配分と、大量の外国人労働者の流入は、国民意識とはいえないまでも、彼らとは違うという「われわれ」意識の形成には寄与している。国民意識よりもムスリムとしての意識が先行する背景には、先述のワッハーブ主義による制約に加え、1950年代からのナセル主義への対抗として、ファイサル国王 (Fayṣal bin 'Abd al-'Azīz Āl Sa'ūd, 第3代, 在位: 1964~1975年) が汎イスラーム主義を唱導したこと、政府としてイスラーム的伝統の創造につとめ、「イスラーム、そして王と祖国」という言説が強調されたことが背景にある (中村 2001, 108-112)。

サウジアラビアはクウェートと異なり、征服王朝であること、国名に支配一族の名を含むことから、征服された部族などからの「サウジ人意識」への抵抗を克服するという課題がある。サウード家による統治の正統性の位置づけは、武力による征服ではなく、イスラームの保護者、シャリーアを施行す

る統治力がサウード家の正統性の基盤であるとしている。しかし、国民からは依然として半信半疑であり、サウード家の統治はワッハーブ主義に必要な権力基盤を提供していると同時に、その理想を汚す代表者としてもみなされている問題がある。

国家主導による国民意識創出の試みとして、中村（2001）は、以下の2段階の取り組みを明らかにしている。第1段階は「超部族的コミュニケーション」の創出とされ、国内での共通点を強調する言説を流布していくものである。具体的には共通の出自として、アラビア半島のアラブ概念を祖国（ワタン）概念として強調し、同一文化としてナジュドの文化を国民文化として定着させ、そのための手法として、民族文化の祭典であるジャナドリーヤ祭を開催している。他方で、宗教に関しては東部のシーア派や南部のザイド派の問題が残る。第2段階は、教育やメディアを政府が独占することによって、国民アイデンティティの創出を図るものである。具体的にはスポーツ振興によって、サウジアラビア代表への応援を通じた一体感の創出を図ったり、「二聖都の守護者」として、イスラームに対する、あるいは世界におけるサウジアラビアの重要な役割を強調し、サウジ人としてのプライドを昂揚するといったことが行われている。また、イスラームの導きと安定による発展にサウード家のリーダーシップを強調している（中村 2001, 104-108, 112-113）。

アブドゥッラー国王のイニシアティブによる国民対話の取り組みのような国内融和を高める努力も続けられているが、サウジアラビアにおいて国民意識はまだ形成途上であり、国家主導の取り組みについての成果に対する評価は定まっていない（AGSIW 2016）。さらに、サウード家による統治の正統性も、ムスリムとしての意識が先行している立場の人びとに対しては必ずしも確立されてはいない。

3. 聖地の管理者・宗教儀礼の主宰者としての権威表出

世俗的な手法によって、国王と国民の関係を制度化することが困難なサウ

ジアラビアにおいて、ムスリム意識が高い「国民」にとって効果的なのは、宗教儀礼を通じて、ワッハーブ主義の宣教活動との政教盟約に基づく正統なイスラーム国家の守護者であることを示すことである。そのための方法として、断食明けの犠牲祭や大巡礼に際してマッカの聖モスクの中心にあるカアバ神殿を覆うキスワと呼ばれる黒い布の交換と清めの作業に国王やサウード家のメンバーから任命されたマッカ州知事があたるなど、宗教儀礼を通じた権威の表出によって、サウード家の権威を高め、統治の正統性原理の確立を図ってきた (Podeh 2011; Piscatori 2005)。これらの儀礼行為は、国営テレビでの中継を通じて、「見せる」対象にサウジアラビア国民を設定しているが、儀礼行為そのものがもつ意味は、サウジアラビア国民に限定されず、全世界のムスリムが対象となっており、国外からの二聖都の守護者としての権威の承認も統治の正統性を支える要素となっている (Long and Maisel 2010, 54-61)。国外からの権威の承認は、サウード家にとっては聖都の守護者としての務めを果たしていることを国民にアピールすることで、国内からの支持を高める正の増幅効果をもつものとなる。

第2節 ナジュドとヒジャーズの統治者から二聖都の守護者への転換

1. サウード家によるヒジャーズ統治の開始と聖地管理

初代国王であるアブドゥルアジーズがヒジャーズを併合し、統治を開始したのは在地の有力者によって構成された「ヒジャーズ祖国党」や商人たちの要請によるものであった。無論、アラビア半島の統一をめざすうえで、商業の中心地であり、世界中から巡礼者が集まる同地方の併合と統治は征服活動の目標に入っていたものではあるが、併合に至る経緯がその後のサウード家によるヒジャーズ統治のあり方を方向づけた。1924年にマッカ、1925年にマディーナとジッダを占領するまで、ヒジャーズ地方は預言者ムハンマドの血

を引くハーシム家のフサイン・イブン・アリー（Ḥusayn ibn ‘Alī al-Hāshimī）によって統治されていた。フサインはヒジャーズ王国の建国を宣言し、オスマン帝国の自治領からの独立を図ったが、イギリスからの援助を断ったことによって財政状況が厳しくなり、ヒジャーズの商人たちに重税を課していた。また、1924年にトルコ共和国によってオスマン帝国以来のカリフが廃位されたことを受け、彼はカリフを自ら称したが、僭称ととらえられ、アラブ世界のなかで孤立化していた。アブドゥルアジーズは、マッカ占領後、退位したフサインの後を継いだ息子のアリー（‘Alī ibn Ḥusayn al-Hāshimī）を追放し、1926年にヒジャーズ王につき、ナジュドとヒジャーズの王を名乗った（1932年に国号をサウジアラビア王国に変更）。

アブドゥルアジーズは、ヒジャーズを統治するにあたって、在地のウラマー（イスラーム法学者）や名望家を体制に取り込んでいったが、その際、自らが組織し、ワッハーブ主義の宣教集団で征服活動の担い手であったイフワーンの扱いに苦慮することとなった。イフワーンはワッハーブ主義の厳格な解釈に従って、聖都の由緒ある墓廟などをイスラームからの逸脱として破壊活動を行い、巡礼団を襲撃して略奪するなどの行為を働いており、地域住民の反発を受けていた。アブドゥルアジーズはナジュドのウラマーをヒジャーズのウラマーと会談させて協議解釈のすり合わせを行い、イフワーンを止めさせ、ヒジャーズ統治にかかわらせなかった。イフワーンは反発したが、アブドゥルアジーズはシャイフ家やおもだったウラマーに自らの政策を納得させて体制内に組み込むことで、政教盟約関係を損なうことを回避し、イフワーンを反乱軍として処分することが可能となった。

アブドゥルアジーズは市民に迎えられてヒジャーズ王についての経緯から、市民の政治参加を歓迎する姿勢を示したが、自らの統治を貫徹させるため、ウラマーとともに有力商人を中心に構成されていた市民議会の改編・解体を進めた。アブドゥルアジーズは1925年12月に在地の有力者を招集して大会議を開催し、ヒジャーズ統治の政体と基本的な勅令の草案を審議させ、翌1926年8月にヒジャーズ王国基本勅令を公布した。基本勅令では、マッカにおか

れた諮問評議会のほか、マディーナとジッダに設置された行政議会、その他の地区議会、村・部族議会、マッカとマディーナ、ジッダに設置された市議会の5種類の議会が設置された。しかしながら、議員はすべて国王による任命制であり、行政府の長が議長を務めることから、行政に対する独立性は有していなかった(中村 2002, 480-485)。祖国党の幹部であった在地の名望家たちは、行政官として統治機構のなかに取り込まれていったが、一部は反サウード家勢力として、「ヒジャーズ解放党」を1927年に結成した。しかしながら、1928年にはヒジャーズ地方で拠点を失い、1932年にはヒジャーズ奪還をめざしてアカバから侵攻を図ったものの撃退され、サウード家の統治に反対する勢力は一掃された。

アブドゥルアジーズはサウード家によるヒジャーズ統治を確立した後も、リヤドとジッダを往復し、ヒジャーズの有力者を通じた民心の把握に努めた。後に国王となる息子のファイサルがヒジャーズ州知事を務め、巡礼団の受け入れ拡大のための整備が進められた。ヒジャーズ地方はサウジアラビアのなかでは人口密度が高く、早くから都市化も進んでいたが、代々の国王によって二聖モスクの拡張と設備の近代化が進められ、巡礼者の受け入れ数は拡大の一途をたどった(MOI 1976)。1950年には約10万人だった巡礼者は、5年後には倍の20万人を超え、1983年には100万人を超えた。巡礼者が年々増加する一方、1970年代以降は、首都リヤドへの人口集中に対応した都市整備や近代化が優先されるようになったこともあり、過密化する巡礼団への対応が十分には追いつかず、圧死など巡礼中の事故に巻き込まれる人数も増加傾向にあった⁽⁴⁾(Tagliacozzo and Toorawa 2016, 132)。

2. ファハド国王による称号変更と聖モスク拡張

サウジアラビアの国王で「二聖都の守護者」を称するよう変更したのは、ファハド国王であった(1986年)。ファハド国王がこの称号を用いた背景には、二聖都をめぐる状況の変化と1979年のイラン革命の影響によって、サウード

家の統治の正統性が脅かされたことによる。革命後イランの最高指導者となったホメイニーがサウード家の支配を批判し、革命を扇動したことに加え、同年にはイフワーンの指導者であったスルターン・ビン・バジャード・オタイビー (Sulṭān bin Bajād al-'Uṭaybī) の孫を首謀者とするマッカの聖モスク占拠事件が発生した。こうした挑戦に対し、1982年に即位したファハド国王は上述のとおり、国王の称号を変更するとともに、守護者であることを視覚的に示すべく、巡礼団の受け入れ拡大とそれに合わせたマッカとマディーナの二聖モスクの拡張事業に取り組んだ。二聖モスクの改良事業自体は、代々の国王によって担われてきたが、ファハド国王による拡張事業は、それまでで最大規模となり、費用総額は700億リヤル (約2兆円: 当時) を超えたといわれている。また、ファハド国王は憲法に相当する統治基本法を1992年に制定したが、そのなかに巡礼者の安全と安心の確保を政府の義務として書き込み、制度化した (第24条) (Piscatori 2005)。

ファハド国王によるマッカとマディーナの二聖モスクの拡張事業は、巡礼者の安全と安心の確保の実践であったが、同時に、近代化の象徴として、エスカレーターや空調システムなど、最新設備を導入することで巡礼者の負担軽減を図るとともに、アッラーの威光を示すというかたちをとって、サウジアラビアの発展とそれを実現させた国王の威信を示すものであった。マディーナの預言者モスクは1984年に、マッカの聖モスクは1989年に、国王が礎石を据える定礎式によって整備事業は開始された。1990年代に入り、巡礼者が100万人を超えることが常態化した状態で、巡礼中には大規模な圧死事故も発生したが、1996年にはそれぞれ100万人が収容可能なかたちで拡張された。ファハド国王による拡張事業は、二聖都の守護者として二聖モスクの保全と維持管理、巡礼者への便宜を図るという務めを果たし、過不足なく執行していることを国内外のムスリムに知らしめ、守護者としての国王への感謝と信頼を獲得することを期待したものであった。

1980年代のサウジアラビアは、逆石油ショックと称する石油価格の低迷にもかかわらず、高福祉政策を維持しており財政が厳しい状況にあった。加え

て、油田地帯でありながら開発が遅れ、シーア派住民の不満が高まっていた東部州のインフラ開発が優先され、リヤドを中心とするナジュド地方とヒジャーズ地方の開発は後回しにされていた (Abir 1993, 107-109)。かかる状況が意味するところは、伝統的支配による統治の正統性に対する内外からの挑戦による危機に、限られた資源の投入でできるかぎりの正統性の回復を図った方策が、ファハド国王による二聖モスクの拡張事業であったということである。ヒジャーズ地方では、二聖モスクの拡張とそれに相応した巡礼者の受け入れ設備の整備に重点がおかれ、都市開発としては不十分などまった面もあったが、巡礼者が100万人を超えることが常態化し、商業的な恩恵の拡大ももたらされたことで、おおむね国王への支持を保つことができたと評価される。

第3節 アブドゥッラー国王による再開発事業の展開

ファハドの後を継いで国王となったアブドゥッラー国王は、ファハド国王の路線を継承して国内の政治過程の制度化を進めるとともに、200万人に迫る勢いとなった巡礼者の受け入れのため、さらなる二聖モスクの拡張事業に取り組んだ。アブドゥッラー国王は、晩年、ファハド国王と同様かそれ以上に改革者として評価されたが、それは、彼がファハド国王の制定した統治基本法と、それに基づき設置した諮問評議会を継承し、政治的な意思決定過程や国民の政治参加の制度化を進めてきたことにある。1995年にファハド国王が脳梗塞で倒れてからは、皇太子兼摂政として実質的に国政を仕切っていたこともあるが、有識者による建白書提出を受けて、諮問評議会の拡張と女性議員の任命、地方評議会選挙の実施など、国民の政治参加について、公式なチャンネルの設定に努めた点で評価されている。しかしながら、諮問評議会は任命制であり、国民の主體的な参加という面では不十分で、合法的支配には程遠いままであった。

アブドゥッラー国王による二聖都の整備事業は、200万人以上の巡礼者を受け入れるべく大規模なものとなり、二聖モスクの拡張と合わせて、聖地の景観を大きく変貌させるものであった⁽⁵⁾。あわせて、巡礼者の玄関口となるジッダ国際空港の拡張と、同空港を挟んでマッカとマディーナを連絡する高速鉄道の建設も進められた。アブドゥッラー国王による整備事業が大規模なものとなった背景には、2000年代に入って石油価格が上昇し、財政的な手立てが可能となったことに加え、ドバイに代表される都市開発ブームと国威発揚につながる超大型・超高層建築の建設競争に刺激されたことがある。また、巡礼者の受け入れ拡大は、産業の多角化と民間部門の育成の一環として、巡礼と組み合わせた観光産業を振興し、石油に代わる財源となること、失業率が高い若年層の雇用創出が期待された。あわせて、後回しとなっていたインフラ整備も進められ、ヒジャーズ地方の居住者の不満解消が図られた。

マッカにおける聖モスクの拡張と、都市鉄道や街路の新設を伴う市街地の再開発事業は、その規模の広大さから、サウジアラビア国民はもとより巡礼に訪れるムスリムに対し、記念碑的なモニュメントとして国威発揚の効果を示したといえる。マッカではファハド国王以前に拡張整備された聖モスクの一部を解体して、北側に建物の拡張が進められており、完成すれば敷地面積はこれまでの倍以上となる。工事期間中は代替的に中心のカアバ神殿を取り囲むように円形のテラスが設置された。また、モスクの南側にはアブラージュ・アル・ベイト・タワーズと称される超高層ビルが建設され、2012年に開業し、6万5000人を収容可能なホテルが入居した。とくに、中央のホテル棟は世界最大の時計塔として再開発事業の目玉となった。モスク拡張と大規模な宿泊施設の整備は、巡礼者の快適性の向上として、大きく歓迎された。一方で、住民や宗教指導者のなかからは、聖モスク周辺の史跡の破壊や住民の立ち退きを伴ったことへの批判や、巡礼の商業化・観光化、富裕層向けのリゾート化が顕著で、巡礼者の費用が高騰することへの懸念もみられた。巡礼者を相手とした観光業や商業は拡大しつつあるが、付加価値税が導入されていないため財源の拡大効果は乏しく、雇用創出についても民間事業者は外国

人労働者への選好が依然として高く、政府が期待した経済効果が現れるまでには時間を要するという課題が残る。

アブドゥッラー国王による二聖都の整備事業が、住民の利便性向上も視野に入れ、インフラ整備を進めている点については、まだ事業が完了していないため、目立った効果は現れていないが、住民の期待は大きく、進捗状況への関心も高い。それを反映してか、2014年以降に石油価格が急落すると、政府は事業予算の確保に対する不安解消に努め、事業の継続を繰り返しメディアを通じてアナウンスした。上述のとおり、1980年代以降、ヒジャーズ地方はインフラ整備が後回しにされていたこともあり、老朽化のため更新の必要が迫っていた。また、インフラ整備の遅れは、度重なる洪水の被害拡大を招いており、不十分な政府の対応に不満が高まり住民のデモが発生していた⁽⁶⁾。アブドゥッラー国王によって開始された、ヒジャーズ地方を対象とした開発事業は、同国王の没後、新たに即位したサルマーン (Salmān bin ‘Abd al-‘Azīz Āl Sa‘ūd) 国王のもとでも継続されている。都市交通を中心とするインフラ整備による住民の利便性向上に加え、紅海沿岸での新たな学術・科学技術産業都市の建設も進み、1990年代以降顕在化した民間部門の育成や若年層の雇用創出、高等教育の拡充と出口の確保といったサウジアラビアが抱える構造的な問題への対処が継続的に必要であり、問題解決の道筋をつけることで国民の支持を期待したものであった。

アブドゥッラーとサルマーンの二代にわたる国王のもとで継続されている二聖都の開発事業は、伝統的支配による正統性を可視化し、その規模と記念碑的なモニュメントの建築によって国威発揚を図り、国民の支持を得ようとする政治的な意味が込められたものであった。2015年には、建設クレーンの倒壊や巡礼者の殺到による大規模な将棋倒し事故など、開発による歪みも現れており、外交関係の悪化したイランから、聖都と巡礼の管理資格を欠いていると伝統的支配の主張に対する批判を受けた⁽⁷⁾。事故への対応の拙さは、国内からも批判と安全性への不信を招き、国王の威信を低下させかねない負の増幅効果も懸念された。しかし、国内では、施工業者や関係者の処分が不

十分であるとの声は表立って上がっておらず、政府の意図するところは、国民に受け入れられているようである。他方で、事業を担当する業者との入札や契約に絡んだ腐敗と汚職の問題への対処が注目されており、再開発事業には、関連する商工会議所の主要メンバーなどビジネス界向けへのレントの配分の側面もあることがわかる。二聖都の再開発事業による伝統的支配の正統性は、レントの分配によって有力な事業者を体制に取り込み、レント配分の恩恵を直接受けない人びとに対しても、利便性を提供し向上を図るかたちで聖都の守護者の役割を具現化し、国民の支持を調達するというメカニズムが稼働しているといえる。

おわりに

本章では、サウジアラビアにおける、サウード家の統治の正統性原理について、二聖都を抱えるヒジャーズ地方の統治の確立と、統治が確立される過程で、二聖都の守護者として巡礼者を迎え、その安全と安心を守るという務めを果たすことによって、威信を獲得し、統治の正統性原理を維持・再構築していくための実践について検討してきた。サウジアラビアはその建国過程において、征服王朝であることとワッハーブ派の宣教運動との政教盟約関係が統治の正統性原理の要素となっていたが、ヒジャーズ地方を統合し、市民の政治参加を制限する一方で、二聖都の守護者として新たな統治の正統性を構築し、維持することに努めてきたことが明らかにされた。ファハド国王による「二聖都の守護者」という称号の使用開始とその実践としての二聖モスクの拡張整備は、外部の対抗イデオロギーに基づくサウジアラビアの体制批判および国内への影響に対抗し、アッラーの威光を示すというかたちをとって、近代化というサウジアラビアの発展とそれを実現させた国王の威信を示し、巡礼者の感謝と信頼を国民にアピールすることで、国内からの支持を高める正の増幅効果を期待したものであった。

ファハド国王が統治基本法を制定し、諮問評議会を設置して、政治過程の制度を進め、アブドゥッラー国王がそれを引き継いだ。サウジアラビアでは諮問評議会は国民の政治参加のチャンネルとはなり得ていない。アブドゥッラー国王の二聖都の再開発計画は街の景観を大きく変える大規模なものであるが、聖都の守護者としての巡礼者の受け入れ拡大や便宜供与に加え、ヒジャーズ地方の開発や、観光立国の一環としての意味合いも込められたものであった。この二聖都の再開発事業は、サウジアラビアが直面する国内課題である脱石油の経済構造の多角化や若者の失業という問題に対する解決策を示すことで国民の支持を獲得し、統治の正統性を維持・再構築しようとするものである。しかし、国民に限定されない、巡礼者への対応を前面に出すことで、巡礼者による評価や信頼が得られ、それによって副次的でありながら、国内の統治の正統性原理の受容につながる、というサウジアラビアの特色が明らかにされた。

〔注〕

- (1) ムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブによる復古主義・純化主義のイスラーム改革運動。思想的には預言者ムハンマドとその教友（サラフ）たちの世代の言行による範例（スンナ）を重視するサラフ主義の系譜に位置づけられる。ワッハーブ派は他称であり、彼ら自身はサラフ主義を自認している（高尾 2014）。
- (2) 「二聖都の守護者」は、歴史的にイスラームの二聖都であるマッカとマディーナを統治し、マッカの聖モスクの中心にあるカアバ神殿を覆う布（キスワ）を大巡礼の際に取り換えるため奉納する権利をもった王朝の君主が用いた称号であった。
- (3) タラール・ビン・アブドゥルアジーズ（Ṭalāl bin ‘Abd al-‘Azīz Āl Sa‘ūd）王子を中心として、政党の結成と選挙の実施による立憲君主制の樹立をめざした活動。
- (4) 巡礼者数に関するデータについては、General Authority for Statisticsにある各年の *Hajj Statistics Annual Report* (<https://www.stats.gov.sa/en/28>, 2017年7月25日最終閲覧) を参照。
- (5) アブドゥッラー国王による聖モスク拡張計画（歴代国王の拡張事業への言及も含む）および都市開発計画については、以下を参照。Makkah Region De-

- velopment Authority (<http://www.mrda.gov.sa/en/>, 2017年7月25日最終閲覧); “Makkah Development Plan valued at SAR 100b” *ME Construction News*, June 22, 2011 (<http://meconstructionnews.com/635/makkah-development-plan-valued-at-sar-100b>, 2011年6月22日最終閲覧); “Saudi overhaul reshapes ‘unrecognisable’ Makkah” *Dawn*, October 1, 2014 (<https://www.dawn.com/news/1135516>, 2014年10月2日最終閲覧); Saudi-US Relations Information Service, “Third Expansion for the Grand Mosque in Mecca” July 13, 2015 (<http://susris.com/2015/07/13/third-expansion-for-the-grand-mosque-in-mecca/>, 2015年7月14日最終閲覧).
- (6) “Saudi plans Jeddah projects after floods, protests” *Reuters*, February 2, 2011 (<http://www.reuters.com/article/saudi-floods-idAFLDE71108S20110202>, 2011年2月3日最終閲覧).
- (7) “Iran president: ‘Punish’ Saudi Arabia for 2015 hajj disaster” *AP NEWS*, September 7, 2016 (<https://www.apnews.com/50b6556eb1a44a55b2aeba674660256d>, 2016年9月8日最終閲覧).

〔参考文献〕

<日本語文献>

- コーデスマン, アンソニー・H. 2012. (中村覚監訳/須藤繁・辻上奈美江訳) 『21世紀のサウジアラビア——政治・外交・経済・エネルギー戦略の成果と挑戦——』明石書店.
- 高尾賢一郎 2014. 「サウジアラビアにおけるサラフィー主義の位置づけ——建国思想, スンナ派正統主義, そしてカウンター・テロリズムへ——」『中東研究』520, 65-73.
- 冨塚俊夫 1993. 「ナショナル・アイデンティティーとしての部族意識——サウディアラビアを中心に——」酒井啓子編『国家・部族・アイデンティティー——アラブ社会の国民形成——』アジア経済研究所 29-78.
- 中田考 1995. 「ワッハブ派の政治理念と国家原理——宣教国家サウディアラビアの成立と変質——」『オリエント』38(1) 79-95.
- 中村覚 2001. 「サウディアラビア王国の国民アイデンティティの成立——過程と特性——」小杉泰編『サウディ・アラビアの総合的研究』(平成12年度外務省委託研究報告書)日本国際問題研究所 81-124.
- 2002. 「サウディアラビア王国の国家形成と支配基盤——都市民と遊牧部族民の政治的役割の分析にむけて——」博士(国際文化)論文 東北大学.
- 2009. 「サウディアラビア王国の国家形成と支配基盤——方法論的検討——」

『近代』101, 5月 89-127.

森伸生 2014. 『サウディアラビア——二聖都の守護者——』山川出版社.

< 英語文献 >

- Abir, Mordechai 1993. *Saudi Arabia : Government, Society, and the Gulf Crisis*, London: Routledge.
- AGSIW (The Arab Gulf States Institute in Washington) 2016. *Gulf Societies in Transition: National Identity and National Projects in the Arab Gulf States*, Washington D. C. (http://www.agsiw.org/wp-content/uploads/2016/06/National-Identity_Web-1.pdf, 2017年7月25日最終閲覧).
- Gause III, F. Gregory 2015. "Oil and Political Mobilization in Saudi Arabia" In *Saudi Arabia in Transition: Insights on Social, Political, Economic and Religious Change*, edited by Bernard Haykel, Thomas Hegghammer, and Stéthane Lacroix, New York: Cambridge University Press, 13-30.
- Ibrahim, Fouad 2006. *The Shi'is of Saudi Arabia*, London and Berkeley: Saqi Books.
- Kéchichian, Joseph A. 2001. *Succession in Saudi Arabia*, New York: Palgrave.
- 2013. *Legal and Political Reforms in Sa'udi Arabia*, Abingdon and New York: Routledge.
- Long, David E., and Sebastian Maisel 2010. *The Kingdom of Saudi Arabia*, Gainesville: University Press of Florida.
- MOI (Ministry of Information) 1976. *Expansion of al-Harameyn al-Sharifeyn*, Damman: Al-Mutawwa Press.
- Niblock, Tim 2006. *Saudi Arabia: Power, Legitimacy and Survival*, London: Routledge.
- Ochsenwald, William 2009. "The Annexation of the Hijaz" In *Religion and Politics in Saudi Arabia: Wahhabism and the State*, edited by Mohammed Ayoob and Hasan Kosebalaban, Boulder and London: Lynne Rienner, 75-89.
- Piscatori, James 2005. "Managing God's Guests: The Pilgrimage, Saudi Arabia and the Politics of Legitimacy" In *Monarchies and Nations: Globalisation and Identity in the Arab States of the Gulf*, edited by Paul Dresch and James Piscatori, London and New York: I. B. Tauris, 222-245.
- Podeh, Elie 2011. "Saudi Arabia: Between Religious and Secular Holidays." In *The Politics of National Celebrations in the Arab Middle East*, edited by Elie Podeh, New York: Cambridge University Press, 255-284.
- Stenslie, Stig 2012. *Regime Stability in Saudi Arabia: The Challenge of Succession*, London: Routledge.
- Tagliacozzo, Eric, and Shawkat M. Toorawa, eds. 2016. *The Hajj: Pilgrimage in Islam*, New York: Cambridge University Press.

Yamani, Mai 2000. *Changed Identities: The Challenge of the New Generation in Saudi Arabia*, London: Royal Institute of International Affairs.